

第49回 令和7年6月24日（火）

「私の田舎は釜石にあります。」

高台の斜面に先祖の墓がありますが、そこから見下ろすとある場所からきれいに家が流されています。
残った家との距離は1メートルくらい。何が生死を分けたのでしょうか。

流された家の先には穏やかできれいな海が広がっています。「あの日」この海が真っ黒になって人々を飲み込んだとはとても想像できません。

釜石市役所に入ると、天井付近の壁に津波の跡が残っています。人間の手の届かないところですから、市役所のこの階にいた人は助からなかったのだろうなと思います。

何年後かに再訪すると、何もなくなっていた場所に少しずつ家が建てられていました。もちろん海岸付近は高く造られていきました。東日本クラスの津波が来ても大丈夫ということで家が建てられているのかもしれません。

でも「あの日」には信じがたい高さの津波が来ました。今までより高くすれば大丈夫なんて思うことは人間のおごりなのでしょう。

私は本が大好きなので良く読みますが、本屋に行くと「大川小学校」関連の本は無条件で買ってしまいます。どうすればあの悲劇は防げたのか。多分防ぐことは簡単だったはずなのです。裏山に登るだけだったので。何がそれを妨げてしまったのか。

「あの日」私は弥栄高校で勤務していました。帰れなくなった生徒たちと2日間くらい学校で過ごしたことを覚えています。阪神大震災の時は学校のテレビで現場の状況を見ましたが、東日本の時はすぐには情報が入ってきませんでした。テレビでは最初、何名か転んで怪我をしたなどの情報を報道していました。本当の被害は40分後に海から襲ってくることを知らずに・・・。

自分ができることは、「あの日」の記憶が「映像」でしかないみなさんに伝え続けていくことだと思います。人間の想定なんてまったくあてにならないということを。

大川小学校の話や防災についてはまたちょくちょく話します。「天災は忘れたころにやってくる」といいます。だからこそ、忘れないようにしたいと思います。